

〔論文〕

睡虎地秦墓竹簡釈文註解(二)

高橋 庸一郎

はじめに

この拙稿は『阪南論集・人文・自然科学編第二十三巻第四号』、『睡虎地秦墓竹簡釈文註解(一)』につづくものである。前号では『編年記』の昭王元年から四十四年までの註解を試みたが、この号では昭王四十五年から今上(秦始皇)四年までの註解を施した。写真図版では解読の困難な所が多く、文物出版社刊行の『睡虎地秦墓竹簡』(本文中では「単行本」と略称した)の釈文に負う所が多かった。

釈文

《史記・秦本紀・秦始皇本紀》に於ける同年関係記事

卅五年、攻大壘(野) ○五大夫賁攻韓、取十城。

王。十二月甲午雞鳴時、喜産。

卅六年、攻□亭。

卅七年、攻長平。十 ○秦攻韓上黨、上黨降趙、秦因攻趙、趙發

睡虎地秦墓竹簡釈文註解(一)

一月、敢産。

卅八年、攻武安。

兵擊秦、相距。秦使武安君白起擊、大破趙於長平、四十餘萬盡殺

○十月、韓獻坦雍。秦軍分爲三軍。武安君

歸。王齕將伐趙(武安)皮牢、拔之。司

馬梗北定太原、盡有韓上黨。正月、兵

罷、復守上黨。其十月、五大夫陵攻趙

邯鄲。

〔卅九年〕、□□□

○正月、益發卒佐陵。陵戰不善、免、王齕

代將。其十月、將軍張唐攻魏、爲蔡尉

捐弗守、還斬之。

〔五十年〕、攻邯鄲(鄲)。○十月、武安君白起有罪、爲士伍、遷陰

密。張唐攻鄭、拔之。十二月、益發卒

軍汾城旁。武安君白起有罪、死。齕攻

邯鄲、不拔、去、還奔汾軍二月餘。

五十二年、攻陽城。

○將軍摎攻韓、取陽城、負黍、斬首四萬。

攻趙、取二十餘縣、首虜九萬。西周君

一

背秦、與諸侯約從、將天下銳兵出伊闕  
攻秦、令秦毋得通陽城。於是秦使將軍  
嫪毐攻西周。

〔五十二〕年、王稽、  
張祿死。

〔五十三〕年、吏誰從  
軍。

五十四年  
五十五年  
五十六年、後九月昭  
死。正月、邀(速)  
產。

○秋、昭襄王卒、子孝文王立。尊唐八子爲  
唐太后、而合其葬於先王。韓王衰經入  
弔祠、諸侯皆使其將相來弔祠、視喪  
事。

孝文王元年、立即死。  
○孝文王除喪、十月己亥即位、三日辛丑  
卒、子莊襄王立。

○東周君與諸侯謀秦、秦使相國呂不韋誅  
之、盡入其國。秦不絕其祀、以陽人地  
賜周君、秦其祭祀、使蒙驁伐韓、韓獻  
成臬、鞏。秦界至大梁、初置三川郡。

○使蒙驁攻趙、定太原。  
○蒙驁攻魏高都、汲、拔之。攻趙榆次、新  
城、狼孟、取三十七城。四月日食。

莊王二年  
莊王三年、莊王死。

(四年)王鮫攻上黨。初置太原郡。魏將

無忌率五國兵擊秦、秦卻於河外。蒙驁  
敗、解而去。五月丙午、莊襄王卒、子  
政立、是爲秦始皇帝。

〔五十三〕年、喜傳。  
晉陽反、元年、將軍蒙驁擊定之。

二年  
○廉公將卒攻卷、斬首三萬。

三年、卷軍。八月、  
○蒙驁攻韓、取十三城。王鮫死。十月、將  
軍蒙驁攻魏氏陽、有詭。

喜掄史。  
〔四年〕、□軍。十一月、  
○拔陽、有詭。三月、軍罷。秦質子歸自  
喜□安陸□史。  
趙、趙太子出歸國。

注 解

(1) この年は、恐らく当該墳墓の墓主であろうと思われる喜の生  
れた年であり、この《編年記》の成立の所以の發生年として重要  
である。この年以前の記述が簡單で、所謂大事記のみであるのに  
対し、この年以後の記述には比較的長いものもあり、また喜を中  
心とした私的な記述が入って来るのは、大事記に重ねて墓主喜喜  
の生涯を記録しておこうとの意志が働いているからである。

《說文》には「野、郊外也、从里予聲。𠄎、古文野、从里省、  
从林」とあり、里については「里、居也。从田、从土」とある。  
また土は「土、地之吐生物者也。二象地之下、地之中物出形也。」  
とする。しかし土については、甲骨文には、𠄎、金文では、𠄎、戦国期  
では、𠄎であって二に从った文字ではない。恐らく且などの原形に

通じるもので土地の神を祭った土盛様のものの象形であろう。田は《説文》に、「陳也。樹穀曰田。象四口十阡陌之制也」とあるから、里の省文として土をとるのは肯首出来よう。しかし野の原形は飽くまで埜であるらしく、甲骨文、金文ともに野の字形そのままに当るものはない。《説文》の予を含む字形も金文より後のものである。漢代の馬王堆出土医書には埜が見える。これが《説文》の古文と野との中間にあたるものである。よって埜は《説文》古文で金文末期、正しく秦代のものと言えるであろう。

地名としての野王は、《史記》始皇六年の条に見える。洛陽の北東50kmにある。現在河南省沁陽の地である。ここに言う「大野王」とは、一説に大字の下にもと行字があったのが脱落したのではないかと言われる。《史記・韓世家》(以後《韓世》と略称す)の桓惠王十年の条(秦昭王四十五年は韓桓惠王十一年に当る)に、「秦撃我於太行」とあるからである。それに野王のすぐ背後に太行山脈が東西に走っており、太行と野王とは略連って一所をなしているとも言えるからである。《秦本紀》(以後《秦紀》と略称す)に、「攻韓取十城」とあるから、これ等の地当然韓地でありこの十城の一であろう。因みに太行山は、《正義》に、「太行山在懷州河内縣北二十五里也」とある。この《編年記》によれば、秦は前年卅四年にも太行を攻めている。韓としても重要な地点であり、秦としても後に三川郡、河内郡をおいた地に囲まれた要害の地とされたのであろう。

これまでの記述には年以下の月、日、時に亘る記述は全くなか

睡虎地秦墓竹簡文註解(二)

ったが、この年以後、喜自身、及びその身近かな私的記述については月、日に到るもの、或は時に時に到るものがある。但し日については干支によって表記されるのみである。《秦紀》の記述には月に亘るものも散見されるが時にまで触れたものは勿論ない。この《編年記》は喜自身が生前に自己の事を含めて大事紀年風に書いたものか、或いは彼の身近かな人物が書きとめて置いたものであろうが、無記述の年のももある所を見ると、その時々にかかれたそのままではなく後にまとめられたものであることが解る。そしてその時に喜自身についての日記風の記述のものと、大事記風のものとが合わせられたのであろう。

雞は《説文》に、「知時畜也」とある。《国語・呉語》に、「爲帶甲三萬、以勢攻、雞鳴乃定」とあり、また《史記・孟嘗君列傳》に、「關法、雞鳴而出客」とある。更に同じく《留侯世家》に、「後五日早會、五日雞鳴、良往、父又先在」とあり、ここでは莫然とながら極めて早い朝を指しているようである。《尚書大傳・卷五》に、「殷以十二月爲正、色尚白、以雞鳴爲朔」とあり、《説文》に、「朔、月一日始蘇也」とあるがこれは一日の始まりということであろう。

喜は人名で、恐らくこの墳墓の主である。産は《説文》に、「生也、从生彥省、聲」とある。喜が生れたということである。

(2) この卅六年については《秦紀》には、その年に当る記事が全くな書かれていない。亭字のつくる地名は、当該十一号墓の随葬器物のうち耳杯に「□亭」、或は陶器に、「安陸市亭」などに見える

三

が、安陸は当該墓主の治める地であり已に秦領内であるから、「攻」する必要はない。亭は《説文》に、「民所安定也、亭有樓、从高省、丁聲」とある。「釈名」には、「亭、亭也、人所停集也、凡驛亭、郵亭、園亭、並取此義爲名」とある。いわば街道沿いの宿場町と言ったようなものであろう。

(3) 《秦本紀》に見える上党は非常に広い範囲にわたっており、趙上党・魏上党・韓上党と称される。《編年紀》に見える長平とは長平亭のこと、以前魏上党の域内にあり、後に韓地にくみ入れられた所であり、高都の北約五十キロにある。この年は趙孝成王六年に当り、《六國趙表》によれば、「使趙括代廉頗將。白起破括四十五萬」とある。この紀事は《趙世家》では、「廉頗免而趙括代將。秦人圍趙括、趙括以軍降、卒四十餘萬皆阬之。王悔不聽趙豹之計、故有長平之禍焉」に当るものである。しかしこの記述は孝成王六年の七月なのか或いは孝成王七年のものなのか議論のある点であるが、この《編年紀》に依って見る限りではやはり六年の七月の記事と考えた方が妥当かと思われる。しかし《韓世家》ではこの年は恒恵王十三年に当るのであるが、十五年の記事に、「秦擊我於大行、我上黨郡守以上黨郡降趙」とあり、十四年の条に、「秦拔趙上黨、殺馬服子卒四十餘萬於長平」とある。太行行については《正義》に、「太行山在懷州河内縣北二十五里也」とあり、これは長平亭の南約七〇キロ、高都の南約三十五キロにある。つまりこの「十年」の記事は、《秦紀》の、「秦攻韓上黨、上黨降趙」に当るのであろう。とすると《秦紀》の四十七年の記

事のうち実際に四十七年中に起った事は「秦使武安君白起擊、大破趙於長平、四十餘萬盡殺」ということになる。すると《韓世家》十四年の記事は本来は十三年の条に記さるべきものということになる。

「敢産」について、敢の字は写真版では必ずしもはっきりしたものではない。敢字は、《説文》には、敢でとり、「𢦏、進取也、从受、古聲、𢦏、籀文𢦏、𢦏、古文𢦏」とある。この字が「古聲」であるというのは少しひつかかるが、段玉裁はこれについて、「古聲在五部、敢在八部、此於雙聲合韻求之、古覽切」と述べる。また籀文の字形について段注は、「ヨ蓋亦爪也、月音胃、用爪、用爰胃而前也、今字作敢、設之隸變」とする。敢は甲骨文には見えないが、金文には「敢對揚王休」（段殷）、「敢拜手稽首、對揚天子丕顯休」（泉伯戎殷）などの慣用の句をはじめとして、「在予御事、釁酒無敢醜、有宗烝祀、無敢擾」（大孟鼎）のような例も多数みられる。その字形は「𢦏」又は「𢦏」であるが、康殷は、「𢦏、都卽倒家形、𢦏、形之省文、手以捉之（甘声）意未甚詳、或有以手捉野豕以示勇敢、果敢之意」と《文字源流淺説》の中で述べているがどうもぴたりしない。これは恐らく何等かの儀礼の象形であろう。神聖な巫箱を前に手に持った玉串様のもので覆い護っているのか、或いは巫箱を無理にこじ開けようとしているのかどちらかであろう。それが「敢えて」や「勇敢」の意味を持つようになった所以であろう。しかしこの字形は秦以後急速に斉形化したものと思われ、馬王堆帛書、居延の漢簡

などはみな取の字体となっている。この『編年紀』は、描文と漢代の隸書の中間に当るものであらうと考えられ、左側の形素の中に目の面影が見える。因みにこの人名取について、韓連琪は『先秦兩漢史論叢』の中で、「當是喜之弟、時喜年三歲」と言っているのは面白い。この弟というのは何の根拠もないが、喜より後に生れて、喜の年譜の中に書かれるとなるとやはり兄弟ということになる。この『編年紀』はこれより後四人の人物の産を記するが、恐らく「荻」以後は喜の子供であって、喜の兄弟ではあるまい。

(4) 武安は邯鄲の西四十キロにある。武安君は秦の白起であり、白起が武安君となったのは『白起列傳』によれば、昭王三十四年以前である。そこから考えると『編年紀』の、「攻武安」は些か奇妙である。已にずっと以前に秦領となった武安を今更なぞ再び秦が攻める必要があるのかということである。これは先づ武安君がいつも武安にとどまっていた訳ではないという事を意味している。『白起列傳』によれば四十七年に秦は趙括の守る城砦を攻める為にひそかに武安白起を上將軍とし、王齕を副將としている。これが『本紀』に見える、「武安君歸」の意味する所であらう。『白起列傳』はつづいて、「趙括至、則出兵擊秦軍。秦軍詳敗而走、張二奇兵以却之。趙軍逐勝、追造秦壁。壁堅拒不得入、而秦奇兵二萬五千人絕趙軍後、又一軍五千騎絕趙壁間、趙軍分而爲二、糧道絕。而秦出輕兵擊之」とあり、これが、「秦軍分爲三軍」の意味であらう。『白起列傳』の四十八年の条は、「秦分軍爲

睡虎地秦墓竹簡文註解(二)

二、王齕攻皮牢、拔之、司馬梗定太原」とする。『編年紀』の「攻武安」については触れる所がない。これは皮牢と武安が可成り接近した所であって作戦としては一つのものとして行われたからではなからうか。即ち趙の廉頗は守った長平の近くに次々に城砦を作りその一つが皮牢であり、他の一つが武安とよばれたのであり、その地が偶々武安に近かったのであらう。

(5) 写真図版では三字ぐらいが書かれていた形跡が見えるが、全部で何字あったのかも不明。

(6) この簡もその字跡ははっきりしない。写真図版のみからではとても、「攻邯軍」とは読めない。『秦紀』では四十八年十月の条に、「五大夫陵攻趙邯鄲」とあり、四十九年の条には、「正月、益發卒佐陵。陵戰不善、免、王齕代將」とある。そして五十年に、「齕攻邯鄲、不拔、去」とある。しかし六国年表では、五十年の秦表に、「王齕、鄭安平圍邯鄲、及齕還軍、拔新中」とあり、囲んだのも軍を還したのも五十年のこととなっている。これは同年の趙表にも、「秦圍我邯鄲、楚魏救我」とある。魏表では、「公子無忌救邯鄲、秦兵解去」となって秦の兵が囲みを解き去ったことのみをこの年のこととしている。また同年の楚表には、「春申君救趙」として、楚が魏とともに趙に援軍を出して秦軍を撃退したことを簡略に記している。『白起列傳』は、「四十九年正月、陵攻邯鄲、少利、秦益發兵佐陵」と『本紀』と略同様の記述が見え、更に、「秦王使王齕代陵將、八九月圍邯鄲、不能拔、楚使春申君及魏公子將兵數十萬攻秦軍、秦軍多失亡」「居三月、諸侯攻秦軍

五

急、秦軍數卻、使者日至」とし、秦軍の將を請われた武安君白起が立たなかったものでついに、「秦王乃使使者賜之劍、自殺。武安君引劍將自剄」「遂自殺、武安君之死也、以秦昭王五十年十一月」として邯鄲攻めの記述を終わっている。つまり秦が趙の都邯鄲を囲んだのは《本紀》《白起列傳》ともに四十八年からである。秦がその囲みを解いたのは、他に《六國表》の記述も五十年となっている。恐らく史実としては《秦紀》《白起列傳》に見られるもので、《六國表》はそれを簡略にしたために、一事件の凡てが同年のことと解されるような記載になってしまったのであろう。

(7) 写真図版は可成り明瞭に「陽城」と読みとれる。邯鄲を攻めあぐねた秦軍は、《秦紀》に、「斃攻邯鄲、不拔、去、還奔汾軍二月餘、攻晉軍、斬首六千、晉楚（集解・徐廣曰、楚、一作走。正義、按、此時無楚軍、走字是也）流死河二萬人。攻汾城、即從唐拔寧新中、寧新中更名安陽。初作河橋」とあるから、邯鄲からそのまま南下して安陽に到り、更にそこから《正義》の、「此橋在同州臨晉縣東、渡河至蒲州、今蒲津橋也」によれば、鄭州の北70キロぐらいの所で黄河に橋をかけ、更に南下して陽城に到ったものと思われる。

(8) 王稽は秦昭王の使として魏へ行った謁者である。王稽は鄭安平とともに張禄を伴って秦へ帰り、張禄を秦昭王に賓客として謁見させた人物である。昭王三十六年のことである。張禄は《史記・范雎列傳》に詳しいが、その范雎その人で、魏から秦に逃げ、王稽の尽力で昭王に謁し、その弁舌と知謀の前に昭王さえひざまづい

たという。後永く昭王の理論的策略家戦略家としてそのうしろだてとなった。昭王四十一年に秦は范雎を応に封じ、応侯と号した。後、応侯は更に秦の宰相となり、四十七年から五十年にかけての秦の趙に対する作戦はすべて応侯に依る所大であったという。王稽は自分の推薦した張禄が宰相にまでなった功により河東の守となったが諸侯と内通して法に問われ誅せられた。《史記》は、張禄・王稽について、大略以上のように記してはいるが、その没年を明確に記している訳ではない。王稽はその記述から、つまり「昭王四十三年、秦攻韓汾陰、拔之、因城河上廣武。後五年、昭王用應侯謀、縱反間賣趙、趙以其故、令馬服子代廉頗將。秦大破趙於長平、遂圍邯鄲。」……「後二歳、王稽爲河東守、與諸侯通、坐法誅」《范雎列傳》、によれば王稽の死は昭王五十年頃ということが推察される。しかし張禄の方は王稽の死以後も何年間か生きていたと思われる記述があり、燕からやって来た蔡沢に実質的にその地位を譲った後も、司馬遷は張禄の死について全く触れていない。しかしいまこの《編年記》を見ると、王稽・應侯は同年に死んでいる。つまり王稽の死後相当あわただしく應侯と蔡沢の交替が行われたらしいことがこれによって解る。張禄は秦王に進言して太后を廃し、穰侯・高陵・華陽・涇陽君などの側近の無能なブレン達を追放させ、晩年にも、秦にとって大功のあった武安君白起を讒言によって殺し、秦のほぼ全権をその手に掌握し、昭王さえほとんど張禄の言いなりであった事を考えると、その名がここ雲夢の安陸という延辺の地にまで聞えていたとしても不思議

議ではない。しかし王稽の名が何故ここに記されねばならなかったであろうか。一介の河東の守であり、法によって誅せられた男である。ひょっとすると《范雎列傳》に見える、「范雎不憚、乃人言於王曰、非王稽之忠、莫能内臣於函谷關、非大王之賢聖、莫能貴臣。今臣官至於相、爵在列侯、王稽之官尚止於謁者、非其内臣之意也。昭王召王稽、拜爲河東守」の逸話が張祿の美談として王稽の名とともに華中にも伝っていたのかもしれない。

更にこの年は正史によれば周の滅亡した年である。秦の將軍摎が西周を攻め、この年にその九鼎を秦に入れたとある。《編年記》にはそれは一字も触れられていない。それはこの年譜が極めて私的なものであるという理由にもよろうが、何よりも当時周の存在そのものもが大いして重要な意味を持っていなかった。即ち夏・殷・周と受けつがれた天命は、孔丘が周公の夢を見なくなった時已に尽きていたのであろう。或いはもうこの時には周が授命の国であるという認識さえこ華中にはなかったのかもしれない。

(9) 《史記・始皇本紀》の十一年の条に、「王翦、桓騎、楊端和攻鄴、取九城。王翦攻閼與、檣揚、皆并爲一軍。翦將十八日、軍歸斗食以下、什推二人從軍」とあり、その索隱に、「言王翦爲將、諸軍中皆歸斗食以下無功佐史、什中唯二人令從軍耳」とある。誰を推と解すると、この兩文は極めてよく似ている。つまり《釋名・釋言語》に、「誰、推也。有推擇、言不能一也」とあるのに従うのである。しかしそれにしても「吏誰從軍」の語は解りにくい。吏の中からすぐれた者を選んでそれを從軍させたというのである

睡虎地秦墓竹簡文註解(一)

うか。

(10) 年以外の記述は全くない。

(11) この年以外の記述があったという形跡は全くない。これ等は竹簡に順次先づ年だけを記入していき、その後記述のあるものを、年の下に加筆していった為に、記事のないものは空白で残ったのである。

(12) 昭は昭王、昭襄王のことである。「後九月」について、《文物出版社》「睡虎地秦墓竹簡」の注は、「秦以十月爲歲首、国月置于岁末、称后九月」と述べている。これは《漢書・高帝紀上》の、「春正月、陽尊懷王爲義帝、實不用其命」につけられた如淳の注に、「以十月爲歲首、而正月更爲三時之月に基くものである。しかしこの部分には他にも説がある。服虔の注は、「漢正月也」とし秦の曆によるのではないとしている。また顔師古は、「凡此諸月號、皆太初正曆之後、記事者追改之、非當時本稱也。以十月爲歲首、即謂十月爲正月。今此眞正月、當時謂之四月耳。他皆類此」という。しかしこれも記述が漢曆によったものという前提に立つものであって、《編年記》は飽くまで秦独自の曆によったものであろうから、漢曆をあてはめて考える訳にはいくまい。それにもしこの九月が歳末の九月なら、邀が生れた正月とは、五十六年の次の年、つまり五十七年か或いは孝文王元年の正月ということになる。それではそれを何故孝文王元年の条に書かずに、五十六年の条に書いたのが問題となろう、思うにこれはつまり「昭死」が公の事柄で年紀としては前に書くべきであるが、実は非常

七

に私的な事柄である遯の誕生の方が正月で、それより前であった。そこで本来私的なこの《編年記》に記入するに当って時期的に後である「昭死」を前に持って来たということわりの為に後という語を加えたのではなからうか。

遯もやはり喜の弟と考えることが妥当であろう。喜が三才の時敢が生れ、喜が十二才の時に遯が生れたことになる。遯は、「説文」に「遯、疾也、从辵、束聲、遯、籀文从𠂔、𠂔、古文、从𠂔、从言」とある。即ち遯は速の籀文である。金文《小臣諶殷》は遯とするから言に従っている。

(13) 《秦紀》に、「昭襄王卒、子孝文王立」と五十六年の秋の条にある。しかし次の年に当る孝文王元年の条にも、「孝文王除喪、十月己亥即位」とある。立と即位とは意味的には如何なる違いがあるか不明である。《編年記》は、「立即位」とあるから、この場合は少くとも立は即位を意味していることになる。梁玉繩は《疑史記》で、「所謂孝文王三年者、正改元之位也、所謂孝文王除喪、十月己亥即位者、正踐祚之位也。是歲在辛亥。三年之喪廢、故孝文期年便除、而因以知昭王之卒。必在秋九月」と述べている。つまり立は改元を伴わないが、即位は改元を伴い、即位は即ち翌年十月で、本来三年服すべき喪を一年だけにして即位したとするのである。この考えにたてば「後九月」は閏九月の意味に解す外ない。しかししたそうした記述は《本紀》、《世家》にはない。抑々王が死ぬ場合、次王の元年はその前王の死と同年とするのか或いは翌年とするのかに問題があるように思われる。即ち死即立であれ

ば編年の冊簡は異にはしていても、昭王五十六年と孝文王元年は同一年の内ということになる。

(14) 《秦紀》によれば孝文王は即位して三日にして卒している。そしてその子が立って莊襄王となったのであるが、この『編年記』の言う莊王元年とは孝文王元年とは同年であろうか、もしそうであるとする昭王五十六年は同時に孝文王元年でもありまた莊王元年でもあるということになる。しかしこの場合も《本紀》には、「子莊襄王立」とある所から、立は改元を意味しないとすれば、まだ即位しておらず、次の年に即位して《編年記》にいう「莊王元年」という表現になったということになる。ただ《六國年表》を見ると秦孝文王元年に当る年は、秦以外の諸国の表にも全く記事が書かれていない。これは孝文元年が非常に短い期間でしかなかったということを物語るものであろう。つまり孝文王の死から一年の後に莊襄王元年が始まるのではなく、やはりこの両元年は同年のことと考えるべきであらう。

(15) 《史記・六國年表》の周表は、周元王元年（BC四七四年）から始まるが、周最後の王の赧王が卒する（BC二五四）までの約二百二十年間、その表は殆んど空白で残され、特筆すべき紀事は全くない。即ち周はそれ程、六国全体から見れば歴史の舞台から已に蹴落された存在であったのであろう。ただ《秦本紀》の五十年に、「西周君背秦、與諸侯約從、將天下銳兵出伊闕攻秦、令秦毋得通陽城。於是秦使將軍嫪毐攻西周、西周君走來自歸、頓首受罪、盡獻其邑三十六城、口三萬。秦王受獻、歸其君於周」とあ



り、更に五十二年の条に、「周民東亡、其器九鼎入秦。周初亡」とある。所が《秦本紀》の莊襄王元年の条には、「東周君與諸侯謀秦、秦使相國呂不韋誅之、盡入其國。秦不絶其祀、以陽人地賜周君、奉其祭祀」とある。即ち五十一年には西周といい、五十二年では周といい、莊襄王元では東周と言っている。五十一年の条では、「歸其君於周」と言っているから恐らく西周と周とは同じ国を言ったものと思われる。それは《周本紀》の赧王五十九年の条に、「周君、王赧卒、周民遂東亡」。秦取九鼎寶器、而遷西周公於「愚狐」とあり、この愚狐とは《集解》に、「徐廣曰愚音憚。愚狐聚與陽人聚相近、在洛陽南百五十里梁、新城之間」とする。これと《秦本紀》の莊襄王元年の、「代陽人地賜周君」と合わせ考えても西周と周とは同国であるということが解る。しかし東周は少し違うようである。《周本紀》では、「秦取九鼎寶器、而遷西周公於愚狐」の後、愚狐に遷された周公の国が東周と呼ばれたかに受けとれる。しかし《秦本紀》では、「秦不絶其祀、以陽人地賜周君、奉其祭祀」以前にすでに、「東周君與諸侯謀秦」の紀事が見えるのである。結局秦昭王五十二年、周では赧王の卒した年、五十九年に「周民遂東亡」したのであるが、どうやらこれが東周という国を作ることになったのではあるまいか。しかしそれも遂には《周本紀》のいう如く、「後七歳、秦莊襄王滅東周、東西周皆入于秦、周既不祀」となるのである。しかしこのことは《秦本紀》にはもう記されていないのである。

(16) 《秦本紀》には、莊襄王の三年の条に、「蒙驁攻魏高都、汲、拔

睡虎地秦墓竹簡釈文註解(二)

之。攻趙榆次、新城、狼孟、取三十七城。四月日食。四年王鮪攻上黨。」更に、「五月丙午、莊襄王卒、子政立、是爲秦始皇帝」とある。これで見ると莊襄王の卒するのは四年ということになる。これについて張文虎は、「莊襄王無四年、《六國年表》書在三年。此四年二字、涉上文四月而衍、觀下文五月即接上文四月、其証也」と言っている。《秦始皇本紀》に、「(秦始皇)以秦昭王四十八年正月生於邯鄲。及生、名爲政、姓趙氏、年十三歳、莊襄王死、政代立爲秦王」とあり、昭王四十八年から十三年目は莊襄王三年となり、莊襄王四年は存在しないことになる。《編年記》の「莊王三年、莊王死」はそれを証明するものである。

(17) 今は《説文》に、「𠂔、是時也、从今、从フ、フ古文及」とする。そして△は同じく「説文」に「△、三合也、从入、一象三合之形」とあり、その意味する所は解しがたい。△は恐らく合と同字であろうが、今と合との関係ははっきりしない。近刊《四川・湖北辭書出版社》《漢語大字典》の、「按、甲、金文象鈴有鈕有舌之形」という解は音の上からも面白い。この《編年記》の場合、今は今上の意味である。《史記、魏其武安侯列傳》に、「今上初即位」、《史記、秦本紀》にも、「今上以重法繩之」、或いは《史記・儒林傳》にも、「及今上即位」などと、当代の天子を表わす語として見える。しかし今一字のみで今上の意味を表わす例はあまり知らない。傳については《漢書・高帝紀上》「五月、漢王屯滎陽蕭何關中老弱未傳者悉詣軍」の傳についての顔師古の注に、「傳著也。言著名籍、給公家衛役也。服音是」とある(服音とは服虔

九

の注に見える音で、「傳音附」を指す。また孟康の注には、「古者二十而傳、三年耕有一年儲、故二十三而後役之」とあり、如淳は、「律、年二十三傳之疇官、各從其父疇學之、高不滿六尺二寸以下爲罷癯。漢儀注云民年二十三爲正、一歲爲衛士、一歲爲材官騎士、習射御騎馳戰陳。又曰年五十六衰老、乃得免爲庶民、就田里。今老弱未嘗傳者皆發之。未二十三爲弱、過五十六爲老」とも記している。これで見ると漢の制によれば傳は二十才か或いは二十三才ということになるが、喜の場合は《編年記》に於て計算すると十七才にすぎない。秦制は漢制とは異なるのであろう。因みに傳は《說文》に、「**傳**、相也、从人、專聲、」とあり、相についてやはり《說文》には、「**相**、省視也、从目、从木、易曰地可觀者莫可觀於木、詩曰相鼠皮」とある。《易》の文と相字とが如何なる關係にあるか判然としないが、顏師古の注に言う「傳、著也」と、傳が省視であるというのは相通するものが感じられる。傳は結局のところ一人前の成人男子となった者を指すのであろう。喜はこの年、はじめて一人前の成人として役所に届出をし、戸籍簿にその名が記されたのであろう。

(18) 卷は、鄭州の北約三十五キロの所にある。《史記・秦本紀》の「集解」によれば、「地理志何南有卷縣」また「正義」には、「卷音丘袁反。括地志云、故卷城在鄭州原武縣西北七里、卽衛雅也」とある地点である。しかしこの地は《秦本紀》によれば、昭王三十三年に、「客卿胡(雋)陽攻魏卷、蔡陽、長社、取之。」とあってすでに秦領にくみ込まれている所である。しかも秦の都咸陽に

も極く近い所であるから、昭王三十三年以来再び魏地に取り返えられていたとも思えない。この卷は、昭王三十三年の卷とは異って、南陽北東七十キロに当る卷城かもしれない。いづれにしても、この年の記述は、卷に軍(戦役)有りということで、喜がそれに参加したとまでは意味しないであらう。卷城は安陸の北二百五十キロ程で、喜の居した地方にとっては比較的身近に感じられたからここに記したのであろう。しかしこの戦役は、《始皇本紀》では二年のことになっていて《編年記》と一致しない。恐らく二年に戦端が開かれて、三年にまで亘り決着したということであらう。榆字は、榆字であらう。地名としての榆は秦代には見当たらないからである。《秦本紀》莊襄王三年に、「攻趙榆次、新城、狼孟、取三十七城」の榆次であらう。「正義」に、「括地志云、榆次、并州縣、即古榆次地也」という。また《趙世家》孝成王十八年の条に、「秦拔我榆次三十七城」とあり、その「集解」に、「徐廣曰、在太原」とある。榆次は現在の太原市から南西約三十キロの所にあった。史は「說文」に、「**史**、記事者也、从又、持中、中正也」とある。「中正也」というのは些か儒教的に偏した解であるが、史はもともと歴史の記録者を言っただものである。《周礼・天官序官》の「府六人、史十有二人」の注には、「凡府史、皆其官長所自辟除」、「史掌書者」とあり、それが《後漢書・楊震傳》の、「召大匠令史考校之」の注は、「史、謂府吏也」というように非常に幅広く使われるようになる。この喜の場合は文書を取り扱う可成下級の役人であらう。喜はここで十九才にしてはじめ

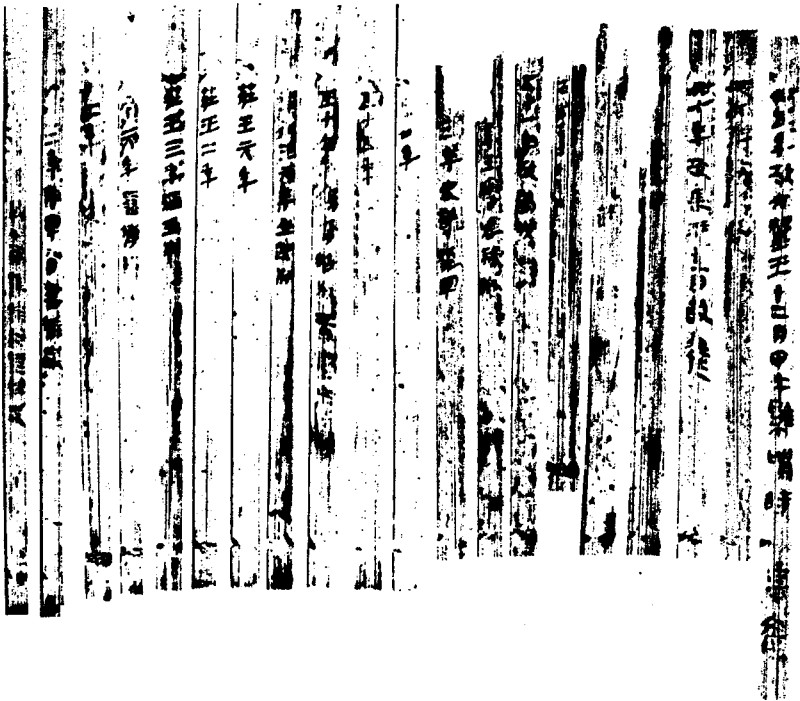
て官吏の職にいたのである。

(19) この簡は年数が全く読みとれないが、次の簡が五年となつてゐるからやはり四年と読むはづのものであろう。《始皇本紀》三年十月の条に、「將軍蒙騫攻魏氏賜、有詭」とあり、また四年の条にも、「拔賜、有詭。三月、軍罷」とある。賜は「素隱」に、「音暢、魏之邑名」とするから、これは全くの推測にすぎないが、この『編年記』の四年の条の軍の上の字は「賜」ではなからうか。三年の巻軍という言い方とも合うし、《商君書・徠民》にも、「周軍之勝、華軍之勝、秦斬首而東之」とあって、高亨もこれに注して、「周軍之勝、當指周赧王五十九年秦威周的一場戦争」、「華軍之勝、指周赧王四十二年秦國打敗魏軍于華下的一场戦争」としてゐるように、この場合の周軍・華軍という言い方にも合つてゐる。この簡の「□軍」以下の文字は写真図版では到底解読不可能である。まして文物出版社刊の単行本で空白となつてゐる部分などは、何等かの文字があるという痕跡こそ認められるもの、それが如何なる文字であるかは想像すら出来ない。しかしこの単行本の注には、「喜下一字疑爲除。陸下一字疑爲御」とある。これは現物を目の前にした睡虎地秦墓竹簡整理小組の所見であるから略間違いないものとしてよからう。除は『説文』に、「除、殿陛也、从頁、余聲」とある。宮殿の階段である。《詩經・蟋蟀》の、「日月其除」や、《詩經・小明》の、「日月方除」などの《毛傳》は、「除去也」、「除、除陳生新也」と變つてくる。そして《漢書・景帝紀》の「列侯薨及諸太傅初除之官、大行奏諡、誄、策」に

睡虎地秦墓竹簡釈文註解(二)

於ける如淳の注は、「凡言除者、除故官就新官也」となる。ここでは単に官位につけるの意味であらう。御は『説文』に、「御、使馬也、从彳、从卸、徐鍇曰卸解車馬也或彳、或卸皆御者之職牛據切、古文御从又从馬」とある。金文等では制御、防御の意味に使われることが多い。御史については《戰國策・韓策三》に、「安邑之御史死、其次恐不得也。輸入爲之謂安令曰、公孫綦爲人請御史於王、王曰、彼固有次乎、吾難取其法、因遽置之」とある。また《韓非子・內儲說上》に、「卜皮爲縣令、其御史汚濁而有愛妾、卜皮乃使少庶子伴愛之、以知御史陰情」とある。これ等から考えると御史は地方の長官、県令等が任命したものではなく、中央政府が派遣したのである。その仕事の内容については《通典・職官、御史臺》詳しい。つまり、「御史之名、周官有之、蓋掌贊書而授法令、非今任也、戰國時、亦有御史、秦趙澠池之會、各命書其事、又淳于髡謂齊王曰、御史在前、則皆記事之職也、至秦・漢、爲糾察之任」とある。法令を起し、事を記録し、文書を掌り、罪を糾察するといふ極めて重要な職務である。しかし始皇四年のこの時に已にそこまで御史という職が整つていたかどうかは疑問である。それにその地方の政治的重要さの違いによつても整備状況が異つてゐたであらう。いまこの喜の場合はまだ二〇才そこそこであるし、これ以前に喜が已に中央政府に係り合つたこともなかったであらうから、この場合の御史は中央政府から任命された訳でもない。よつてその地方の有力者か或いはその一族の中から秀れた者を推薦さ

せて、それを中央が任命したのであろう。よってこの場合喜はま  
だそれ程の重責を荷ったわけではない。



四十五年  
四十六年  
四十七年  
四十八年  
四十九年  
五十年  
五十一年  
五十二年  
五十三年  
五十四年  
五十五年  
五十六年  
孝文王元年  
莊王元年  
二年  
三年  
今元年  
二年  
三年  
四年